

令和2年度(第64回)岩手県教育研究発表会
【いきる・かかわる・そなえる分科会】

「いわての復興スクール〈内陸〉」

中高等部を中心とした、本校防災学習の実践

岩手県立前沢明峰支援学校 教諭 伊藤明彦

岩手県立前沢明峰支援学校

本校の概要



- 知的障がいや肢体不自由を始めとする、特別な支援が必要な児童生徒が学ぶ特別支援学校
- 全校児童生徒133名
(小学部31名、中学部34名、高等部68名)
- 学校教育目標

児童生徒一人ひとりが個性と能力を発揮し、可能性を最大限に高め、自立的・主体的な生活を送る。

本校の立地



【奥州市前沢地域】

- ・中央部を北上川が流れ、東西を奥羽山脈と北上高地に挟まれている。
- ・本校周辺を俯瞰すると、本校敷地の東側には段丘が位置し、北側には北上川に注ぐ支流が流れている。
- ・そのため、地震や火災(地震によるものも含む)に加え、豪雨等による河川氾濫や崖崩れ等が懸念される。

本校の立地



北上川方面

【写真の角度にハザードマップを重ねる】

- ・北上川氾濫の浸水区域は外れている。
- ・校舎北部には河川が流れており、バックウォーター現象による氾濫が懸念される。
- ・西側には急傾斜地崩落危険箇所がある。

本校の状況

避難訓練：年間5回実施

回数	実施月	内容
第1回	4月	火災
第2回	5月	不審者侵入
第3回	6月	地震からの火災発生
第4回	9月	地震からの停電発生(地域合同避難訓練<後述>)
第5回	11月	地震からの火災発生(児童生徒予告なし)



近年頻発している洪水や河川氾濫への対応や、総合的に防災を学ぶ機会については十分ではない。

本事業について

いわての復興教育プログラムに基づき、「いきる」「かかわる」「そなえる」の3つの教育的価値を本事業と関連させ、**地域の人材を生かした具体的な体験学習や関連施設の見学、成果のまとめ学習等**を実施する。



【目標】

児童生徒一人一人が、学習(災害時対応訓練等)で身につけた力を生かせる。

関係機関や連携校と協同し、防災に係る研修や各校との情報共有を基に、**地域の特性に応じた持続的で発展的な取組体制を構築する。**



【連携校】

奥州市立前沢小学校
奥州市立前沢中学校
岩手県立前沢高等学校

主な事業の内容(概要)

実施月	取組内容	備考
7月	・奥州市防災士会による防災学習①【水害】 ・防災研修会	・連携校職員の参加と意見交換
9月	・「東日本大震災津波伝承館」見学 ・地域合同避難訓練(第4回避難訓練) ・中学部3年生修学旅行	・行政区民、近隣施設職員の参加と意見交換
11月	・奥州市防災士会による防災学習①【火災】 ・校舎周辺のハザードマップ読取と、避難路確認	
12月	・奥州市防災士会による防災学習①【地震】	
1月	・まとめポスター作成 ・校内発表(ポスター掲示)	
2月	・ポスター交流校掲示(予定)	・前沢高等学校へ掲示(予定)

連携校職員へ
見学案内



事業実施に あたって (学習集団の設定)



新規に防災学習を設定した学習集団

高等部生徒

- ・進路学習(※)からの選抜生徒33名
(1～3年生)
- ・6グループに分けて実施

中学部生徒

中学部3年生:12名

なお、他の生徒は「避難訓練を中心に、昨年までの内容を継続して実践するグループ」とした。

※進路学習(学校設定教科で、本校独自の教科)

事業1 「高等部生徒による防災学習」

- 1 奥州市防災士会「絆」による防災学習
- 2 震災関連施設見学
- 3 校舎周辺のハザードマップ読み取りと、
避難経路の確認
- 4 まとめ・成果発表

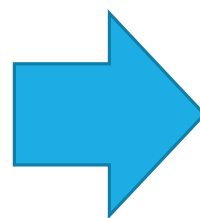
1 奥州市防災士会「絆」による 防災学習

地域の防災士会に協力いただき、
総合的に防災を学ぶ時間を設定。

全3回:「水害」「火災」「地震」

【基本とした内容】

- ・災害が起きる仕組み
- ・事前に準備しておくこと
- ・具体的な避難方法
- ・防災に関連した実技講習



実技を中心とし
た体験型学習

防災士会による 防災学習 「水害(7月)」

【主な内容】

〈水害の危険性〉ラジオやテレビの防災気象警報を聴くこと、普段からの危険な場所の把握等)

〈具体的な避難方法〉夜の避難の危険性、避難に適した履物等

〈防災に係る実技講習〉段ボールベッド体験・新聞スリッパの作成)



防災学習の様子1



具体物を提示した学習展開



段ボールベッド体験



身近なものの活用1(新聞紙スリッパの作成)

防災士会による 防災学習 「火災(11月)」

【主な内容】

〈火災の危険性〉煙の危険性、
炎のスピード等

〈具体的な火災対応〉大声で知
らせること、濡らした毛布をか
ぶること等

〈具体的な避難方法〉姿勢を低
くすること、ビニール袋を使った
避難等

〈防災に係る実技講習〉ビニール
袋ポンチョの製作・買い袋を
活用した三角巾



火災時に低い姿勢で避難する練習 身近なものの活用2(コンビニ袋で三角巾を作る)



身近なものの活用3(ビニール袋ポンチョ作製)

防災士会による 防災学習 「地震(12月)」

【主な内容】

〈地震発生の原因〉

〈地震後の行動〉「身の安全を優先した行動」、外に飛び出すことの危険性、情報収集の大切さ等

〈防災に係る実技講習〉サランラップを活用した止血・応急処置、毛布やシーツを使った搬送



防災学習の様子2



背負って搬送する手本を提示



身近なものの活用4
(ラップと雑誌で患部を固定する)



毛布を使った傷病者搬送体験

生徒の感想 (一部)



【水害】

- ・自分の命は自分で守ること。
- ・浸水した道路を歩くときは、運動靴がよい。
- ・段ボールが意外に使えることが分かった。

【火災】

- ・火事で亡くなった人のほとんどが煙が原因ということを知りました。
- ・姿勢を低くして避難することが大事だと思った。階段の角に空気があることを知った。
- ・ゴミ袋が寒くなったときの服代わりになることが分かった。

【地震】

- ・地震から火事が多いことを初めて知りました。
- ・けがをした人を運ぶ方法を覚えました。
- ・「たすけられるがわからたすけるがわへ」ということがぐっときました。
- ・自分でも出来ることがあるんだと思いました。

2 震災関連施設見学

【目的】

- ・本県沿岸部の震災関連施設の見学と災害体験聴講等をとおして、
東日本大震災の被害と現在の復興の様子について知る。
- ・県内で起こった災害の様子を知ることにより、
防災を身近なこととして考える契機とする。

【見学先】

東日本大震災津波伝承館(岩手県陸前高田市)

「陸前高田津波 伝承館」見学



伝承館での展示や映像で、
事実と復興の過程を知る



展示物見学を通して被害を学ぶ



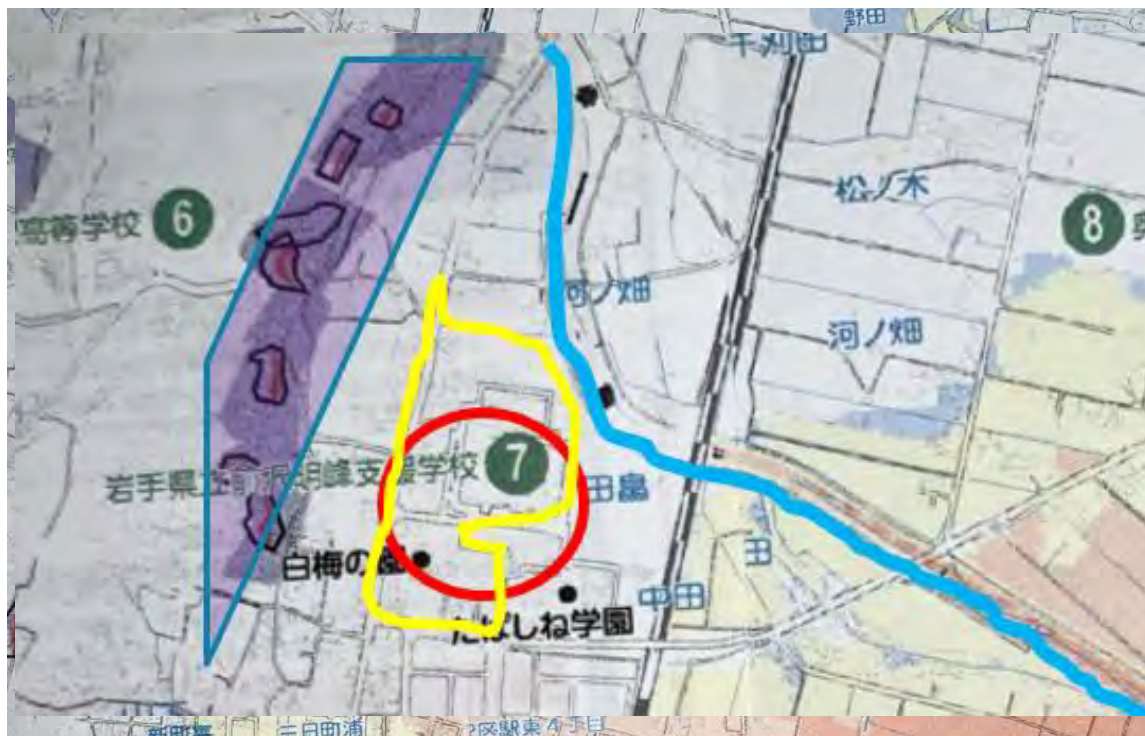
「奇跡の一本松」を見学

生徒の感想 (一部)



- ・三陸は、以前にも津波があったことを
初めて知りました。
- ・決して自分だけが大丈夫と思わないことが
大事だと知りました。
- ・つなみがきたら、たかだいににげるのを
まなびました。
- ・「つなみてんでんこ」ということを学びました。
- ・じっさいにきたら、ふるえているじぶんを
そうぞうしました。
- ・自分の命は自分で守ること(の大切さ)を覚えた。

3 校舎周辺のハザードマップ読み取りと 避難路の確認



ハザードマップを基に、学校周辺の危険箇所について実際に歩いて場所や方向を確認。

大規模河川(北上川)の方向や校舎東側の段丘、本校北側を流れる小規模河川等を、目視と指さしで確認した。

まとめ・成果発表

まとめ学習として、グループごとにポスターを作成した。

校内掲示の他、交流校である前沢高校で掲示予定。



グループごとに、学習の感想やまとめのアイデアを出し合いながら作成

完成したポスター(一部)

水害

1 危険な場所には近づかない。
2 天気が荒れる前に、避難場所を確認する。

火災

1. 早く逃げる。
2. 一度外に出たら、中に戻らない。
3. 火元から離れる。

地震

1 丈夫なテーブルの下や、物が落ちてこない、倒れてこない「移動してこない」ところにける。

知ろう・備えよう・防ぼう

災害に対する備えをして命を守ろう。

自分の命は自分で守る

命を貫く!!! 3班

◎ これまでに ◎ 東日本大震災津波伝承館を見学し学んできたこと

水害編

土石崩れや洪水などの水害が起きた時は高い場所へ避難する事が大切である。
水の中を歩く時は、暴風やスノーボード運動靴の方が良い。一日でも早く自宅避難をすることが大切である。

地震編

揺れが強いときは近くの丈夫なテーブルやつくえなどの下に自分の体が入る空間の所に行く。また津波に備えて普段の生活に避難場所の土場所を覚えておく。

火災編

(1) 服装は防火服にこだわらず、(2) 一度外に出たら、二度と戻らない。火元から離れる。
(3) 避難場所には避難経路の確保が大切である。
(4) 火元から避難する時は、避難経路を確認する。
(5) 火元から避難する時は、避難経路を確認する。
(6) 火元から避難する時は、避難経路を確認する。

骨折した時の対処法

く使うもの
ラップ、新聞紙、新聞紙、新聞紙
く方法
骨折したところに新聞紙を巻きラップをまた巻いて固定する。

けがした人を運ぶ方法

く使うもの
毛布
く方法
毛布に人を乗せて、くるみあたま部分を持ち上げて、2人で毛布の端を引っ張る。

寒さをしのぐ方法

く使う物
ゴミ袋
く方法
ゴミ袋をハサミで袋の底の部分(点線部)を切り取って着る!

事業2 避難訓練での取組

[地域合同避難訓練]

・本校での避難訓練全5回のうち第4回目の訓練

- 1 避難訓練
- 2 AED使用体験
- 3 防災学習及び避難用スロープ体験
- 4 シェイクアウト訓練
- 5 防災食喫食

本校の状況

避難訓練：年間5回実施

回数	実施月	内容	備考
第1回	4月	火災	基本的な動き方の確認
第2回	5月	不審者侵入	
第3回	6月	地震からの火災発生	基本的な動き方の確認
第4回	9月	地震からの停電発生 (地域合同避難訓練<本訓練>)	「安全確保指導体制」を基本とした訓練
第5回	11月	地震からの火災発生 (児童生徒予告なし)	「安全確保指導体制」を基本とした訓練

1 避難訓練

【想定】

地震からの停電発生

【訓練の方針】

「(本校)安全確保指導体制」を基本に、一人ひとりが安全確保等の状況判断を行い避難する。



※当日、避難完了後の様子

【参加者】

- ・本校全児童生徒職員
- ・行政区長
- ・近隣の福祉型障害児入所施設、障がい者施設職員〈計260名参加〉

2 AED使用体験

【対象】

高等部防災学習対象生徒

【主な内容】

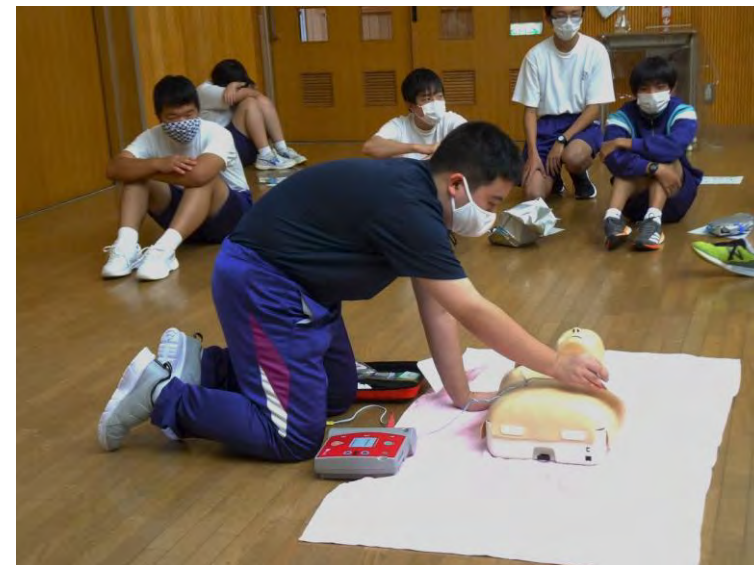
〈AEDとは〉使用の目的、電気ショックまでの時間と生存率等)

〈AED使用体験〉電話での連絡方法、訓練用AEDの使用

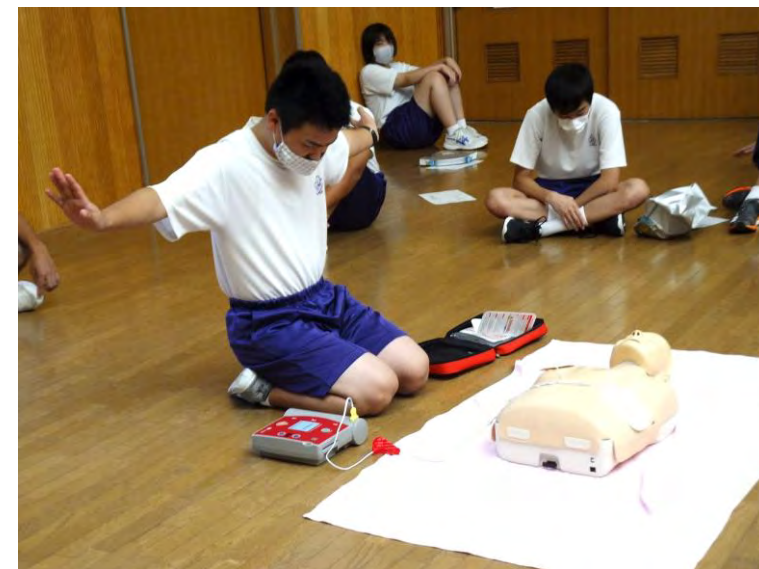
〈校内でのAED設置場所確認〉
本校はスクールバスも含め全3カ所設置



119番に電話をかける練習



肩を叩いて呼びかける



離れるよう周囲に声をかける

3 防災学習及び避難用スロープ体験 4 シェイクアウト訓練

3 防災学習及び避難用スロープ体験

対象：小中学部児童生徒

4 シェイクアウト訓練

対象：高等部生徒が実施

学年ごと校内3カ所に分かれ、その時にいる場所での「安全確保」「避難」について体験的に学習



5 防災食喫食



【ザ・カレーライス (株)非常食研究所】

- ・食物アレルギー特定原材料27品目不使用
- ・水、熱、調理不要
- ・スプーンで混ぜることで、介護食（刻み食・流動食）離乳食が作成可能

5 防災食喫食



◆保存方法
直射日光を避け屋内で
80℃以下で保管

◆保存料・殺菌剤等
一切使用していません。

食物アレルギー特定原材料27品目不使用

7大アレルギー
卵・乳・小麦・そば・落花生・エビ・カニ

20アレルギー
いくら・キウイフルーツ・くるみ・大豆
バナナ・やまいも・カシューナッツ・もも
ごま・さば・さけ・いか・鶏肉・りんご
まつたけ・あわび・オレンジ・牛肉
ゼラチン・豚肉

ライフライン（電気・ガス・水道・
交通・通信等）全てが遮断されて
もお召し上がり頂けます！
刻み食・離乳食・流動食対応
（スプーン1本で加工可能！）

製造工場では下製原材料由来の材料を
使用し、上巻の製品を製造しております。
鶏・卵・小麦・そば・落花生・大豆
バナナ・カシューナッツ・りんご・さば
さけ・いか・鶏肉・りんご
オレンジ・牛肉・ゼラチン・豚肉

介護食（刻み食・流動食）離乳食の作成方法

1.ルーとごはんをよく混ぜるとお粥になります。
2.図①の様にスプーンを持ち、図②の様にお粥をスプーン側面で
叩くと**刻み食**に。時間をかけると**離乳食・流動食**に
なります。

図① スプーンの持ち方

図②

健康者

お粥

刻み食
（離乳食・流動食）

グリーン購入法適合品
Fun to Share

※米が足りない場合は、お粥などに追加することがあります。

標準価格
580円（税別） 190601-4

- ・食物アレルギー特定原材料27品目が不使用
- ・混ぜることで「刻み食」「流動食」等への対応が可能

様々な実態の生徒に適用できた

生徒の感想 (一部)



【避難訓練】

- ・素早く行動できました。
- ・いろいろなことがおこることをそうていしてうごきたい。

【AED体験】

- ・少しでも早く使うことで命をすくうことができることが分かった。
- ・人生で初めて使った。学校だけでなく、いろんな場所にあるってことを知った。
- ・じしんがなくてもつかわなきゃいけないということが大事だと思いました。

【非常食体験】

- ・どんなものなのかをすることができて良かったです。
- ・非常食はまずいいイメージがあるが、おいしく食べられた。
- ・特別食を食べている生徒が学級にいたので、形状が心配だったが、問題なく食べることができました。普通食の子も安心して食べることができる保存食はありがたいと思いました(担任の感想)

【防災学習事後アンケートの結果】

【防災学習（対象生徒33名）】

項目/尺度	A	B	C	D	欠席等
水害	25	2	2	0	4/33名
火災	23	4	1	0	5/33名
地震	22	2	1	0	8/33名
本学習を通して	23	2	0	0	8/33名

【避難訓練（地域合同避難訓練：対象生徒33名）】

項目/尺度	A	B	C	D	欠席等
避難訓練	20	11	1	0	1/33名
AED体験	16	13	3	0	1/33名
非常食体験	14	12	2	4	1/33名

【防災学習事後アンケートに係る4尺度】

A（肯定：うまくできた・よかった等） B（やや肯定：まあまあうまくできた・まあまあよかった等）
C（やや否定：あまりできなかった・あまりよくなかった） D（否定：できなかった、よくなかった）

事業3 「修学旅行での取組」

1 対象

本校中学部3年生(12名)

2 目的

三陸沿岸の修学旅行を通して、「いきる・かかわる・そなえる」を学ぶ。

「見る」「聞く」「味わう」「感じる」「体験する」などの活動を通し、困難な状況でも自主性をもって力強く生き抜く子どもたちの育成につなげる。

【見学・体験先】

1 三陸鉄道

「震災学習列車」乗車〈盛駅～釜石駅〉〈田野畑駅～久慈駅〉

- ・駅長さんからの講話
- ・車窓鑑賞

2 かもめテラス(大船渡市)

- ・「かもめの玉子」デコ体験

3 漁業体験(山田町)

- ・漁師さんからの講話
- ・牡蠣や帆立の清掃体験(表面の不純物を刃物で落とす)

【事前学習】

1 地図を使った学習

- ・自分の学校の場所
- ・修学旅行で行く場所



2 「東日本大震災」についての学習

- ・当時の新聞を使った震災学習



3 「現在の三陸沿岸部」についての学習



4 修学旅行に向けて、「自分は何ができるか」を考える

【今、自分たちにできること】

- 1 宿泊場所・見学場所の避難経路、避難場所の確認
- 2 これからの避難訓練への取り組み方(意識を変える)
- 3 命を守る行動を心がける(考える)

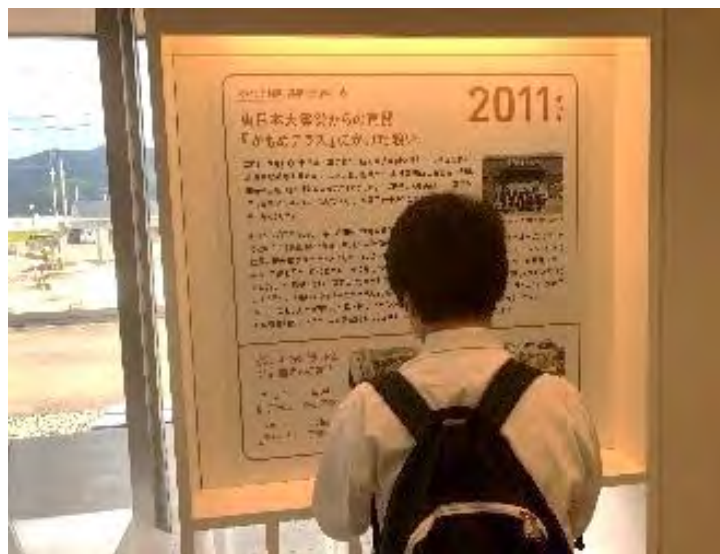


見学・宿泊先での様子

体験を通して、それぞれの場所で、「いきる・かかわる・そなえる」につながる学びができた。



宿泊場所や見学施設での避難経路の確認



かもめテラスで説明を読む



三陸駅で黙祷する

【事後学習】

1 学習の振り返り

- ・現在の三陸沿岸部の様子についてまとめる。
- ・体験したことについてまとめる。
- ・「自分の行動について」振り返る等

- ## 2 これから「自分の身を守る」ために行うことを全員で確認 (危機発生時や訓練での行動について考える)
- ・「動かない」「低い姿勢をとる」「頭を守る」



すぐに命を守る行動をとる大切さを、学年全体で確認できた。

事業4 「連携校との 取組」



【講演テーマ】

危機への対応

【目 的】

- ・洪水を主とした各種の災害時に、本校近隣で発生する災害リスクについて知る。
- ・ハザードマップから読み取る災害リスクについて知る。

【講 師】

越野 修三氏

（岩手大学地域防災研究センター客員教授）

【参加者】

本校職員、連携校（前沢小中高等学校3校の副校長及び防災担当者）

事業4 「連携校との 取組」



【内 容】

- ・危機の定義
- ・豪雨・土砂災害について
- ・(豪雨や洪水を主とした)各種の災害時に本校周辺で想定される災害リスク
- ・状況判断の思考過程と対策(演習)等

〈終了後〉

連携校担当者との情報交換

- ・避難方法や場所の確認と共有
- ・地域で災害が想定される具体的地点の確認と共有

講師助言

「情報収集(判断するための情報)」と「危機予測」を基本とした「状況判断(適切に判断すること)」の重要性

【成果】

1 防災学習での取組について

- ・学習内容は、生徒の興味や関心に沿ったものであった。
- ・特別な支援が必要な生徒の防災スキルについては、従来「訓練の中で繰り返し身に付ける」内容が主流（「助けられる側」の側面が比較的強い）。
- ・今回の学習を通して、**生徒のアンケートからも積極的な感想や意見が出て**いる。
- ・「自分の命は自分で守る」ために「いきる」「かかわる」「そなえる」力が育ち、**「進んで行動する側」へ、生徒の意識と行動が変容していくことを願いたい。**

助けられる側
守られる側



自分の命は自分で守る

「いきる・かかわ
る・そなえる」力の
育成



進んで行動
する側へ

【成果】

2 地域連携について

- ・連携校担当者を招いて職員研修会を実施した。
- ・想定される災害リスクや避難場所、具体的に注意が必要な地点等について連携校全体で確認・共有できた。
- ・今回の情報共有と、講師からいただいた示唆は大きな成果であった。

3 中学部での実践について

- ・生活経験等が必ずしも多くない本校生徒にとって、「体験すること」の意義は大きい。
- ・今回、「東日本大震災」や「現在の沿岸の様子」について、体験を通して学ぶことができた。
- ・本学習を経て、「地域や郷土を知る」視点や一人ひとりの防災意識が、体験を通して深まり広がった。

【課題】

- 1 「学んだことの定着の難しさ」がある児童生徒について、家庭場面や実際の災害場面で発揮できるために、どのような取り組みが必要か。
- 2 本事業対象以外の児童生徒の学びについて、成果と課題検証の必要性
また、防災についての学習が継続的に積み重なっているかの検証も重要。
- 3 事業内容や成果を次年度以降の教育課程に取り入れるために、（継続的、持続的、発展的な内容となるような視点での）取捨選択と検討が必要。

【おわりに】

コロナウイルス感染症対策を処しながらの事業だったため、講師の先生方を始め、校内及び連携校の先生方には多くの協力をいただきました。

本事業に関わっていただいた全ての皆様に、この場を借りてお礼を申し上げます。

ご静聴ありがとうございました